時評

原発事故後の言葉

大口玲子

本田一弘第三歌集『磐梯』が刊行された。前歌集と同様、旧仮名の文語体で書かれた「後記」が印象的である。これは単に文語というスタイルや伝統への志向だけではなく、会津に生まれ育った作者の、現代日本語やそれを行き渡らせるための国語教育への懐疑、ひいてはそれらを言語政策として進めてきた日本という国への不服従の表明であると言っても言い過ぎではないだろう。

・訛れるをわらふ東京（とうけい）　近代はわがみちのくのことば殺しつ
・官軍に原子力発電所にふるさとを追はれ続けるふくしま人（びと）は
・夫れ雪はゆきにあらなくみちのくの会津の雪は濁音である
・おめえらはなんで生ぎでる嗄れたからすのこゑよ曇天に満つ
・いづになつたら帰つて来（く）んだ　ぶらんこのなくこゑがする秋の月の夜
・田植うた聴きし泥（でろ）かもわか苗をむだきて水の香ひする風
・青布（あをにの）に覆はれてゐるふくしまの真土の息嘯（おきそ）きこえけらずや

一・二首目には作者の「近代」「官軍」に対する批判が明らかだが、それだけではなく、会津の方言や上代の東国方言が自然なものとして取り入れられていて、その豊かな表現の幅そのものが現代日本語への批判となっているように感じた。表記において、本集で妻が詠まれる時は必ず「嬬」の漢字が使われ、三首目では、「ゆき」という表記では会津の雪を表現することができないと断言している。からすやぶらんこの会津なまりの「こゑ」は人間の本質を直截に問い、「泥（でろ）」「むだきて」という東歌を思わせる語彙は、一首に泥臭く素朴な雰囲気を呼び込んでいる。「香ひ」という表記からは、白秋の「風が香ひをつたへるのでない。香ひが風をすずろかせるのだ」という文章を思い出す。最後の歌は、原発事故後の汚染土がブルーシートに覆われている様子だろう。「青布（あをにの）」「ふくしまの真土の息嘯（おきそ）」という古語を含んだ端正で重苦しい表現が、福島の現在とやり場のない嘆きをなまなましく伝えている。

・モニタリングポスト埋もるる雪の朝われと生徒と白き息吐く
・「甲状腺検査」だといふ五時間目「古典」の授業に五人公欠
・「頑張ろう福島」とある立看板（たてかん）のとなりでさくらがんばらず咲く
・漢語もて双葉のからだ切り分くる避難指示解除準備区域とぞ
・春雨にあらで洗はれゆく屋根よ、ふるさと除染実施計画

一・二首目は、原発事故後の福島の「日常」を鋭く切り取った秀歌である。しかし、本集を最初から読み進めてきた読者は、後半になって「モニタリングポスト」「甲状腺検査」という語彙が侵入してくる「異常」に愕然とする。さらに「避難指示解除準備区域」「ふるさと除染実施計画」などの言葉がはらむいかがわしさと虚しさ。原発事故は自然や生活を変えただけではなく、私たちの言葉にも否応なく浸透してくるのではないかという恐怖を覚えた。

・みちのくの死者死ぬなかれひとりづつわれがあなたの死をうたふまで
・忘れえぬこゑみちてゐる夏のそら死者は生者を許さざりけり

震災直後の歌と掉尾の一首である。命がけの使命感を持って死者のかわりに歌おうとする作者の言葉に、今後も注目したい。